



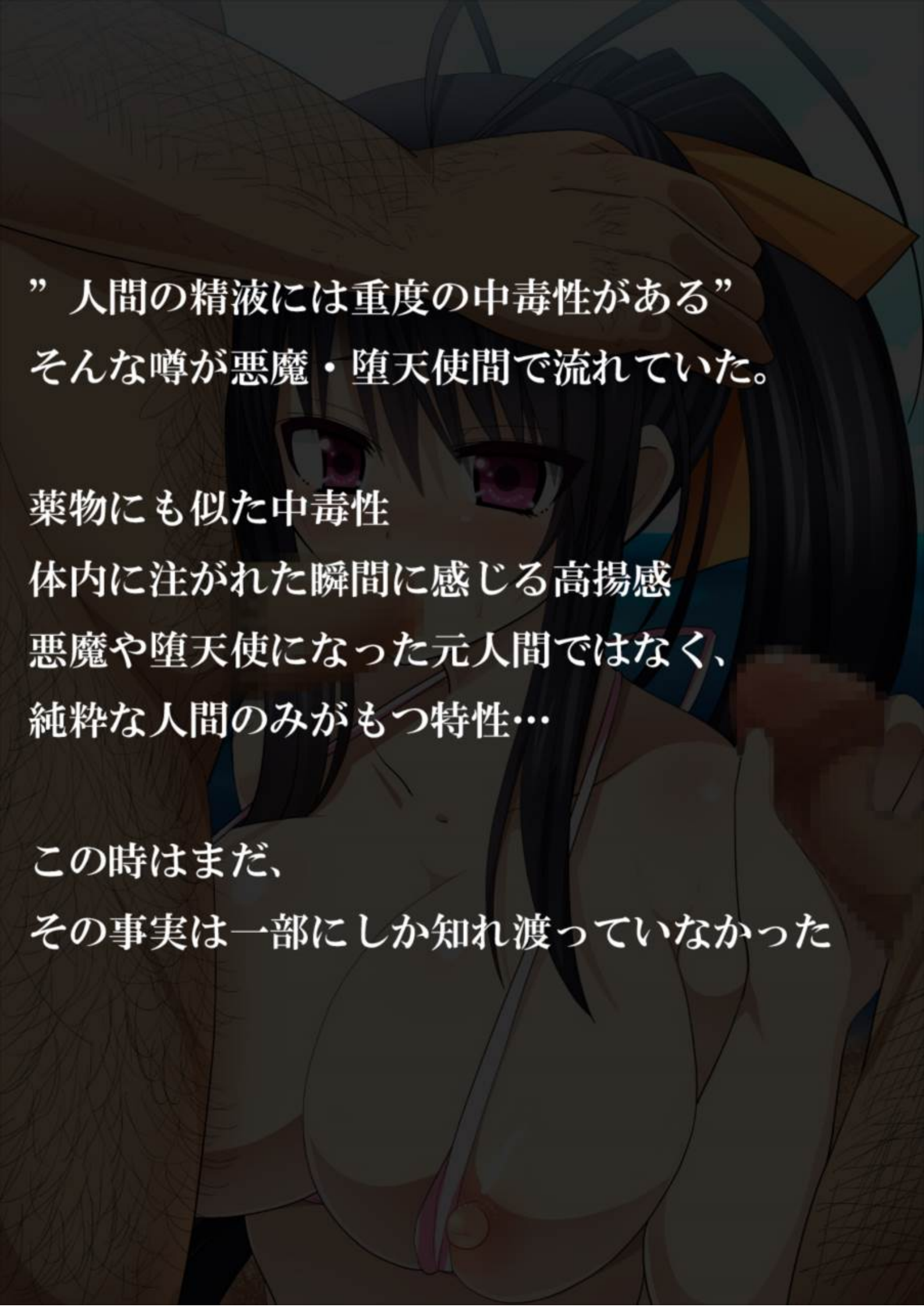
コスプレD×D！即ハメ作戦！

～ザーメン喰らって一発KO！？～

V1.02

驚異の中毒性を持つ…精液！

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



”人間の精液には重度の中毒性がある”
そんな噂が悪魔・墮天使間で流れていた。

薬物にも似た中毒性

体内に注がれた瞬間に感じる高揚感

悪魔や墮天使になった元人間ではなく、

純粋な人間のみがもつ特性…

この時はまだ、

その事実是一部にしか知れ渡っていなかった

「んっ、ちゅっ、ちゅる…」

「うう、まさかこんな美人さんにしゃぶってもらえるとはなあ…
ほら、しっかりとしゃぶってくださいよ」

ちゅっ

んっ

「ごっちも…手でお願ひします」

んっ

んっ

んっ

んっ



「おお、おお…夢のようだあ…」

しばらく抜いてなかったものど…んぐらぐら…」

ガク

ガク

「じゅぽっ、じゅっ、ちゅるるーじゅぽ、じゅぽ…」

んッ

んッ

んッ

「はあ、はあ…口の中あつたかくて気もちいい〜…」

たっぷり栄養を取らせてあげますからねえ…!」

「んじゅう!?!んごい!?!んごい!?!じゅぞろ!?!」

んごい

んごい

んごい

んごい

んごい

んごい

「おお…!こっちも、そろそろ出てしまおう…!」

「くっほお〜……!のんで!飲んでくださいわ〜……!

くっほお〜……!

くっほお〜

くっほお〜

ドクッ

ドクッ

ズ

「あぁっ〜んんんんんんん〜」

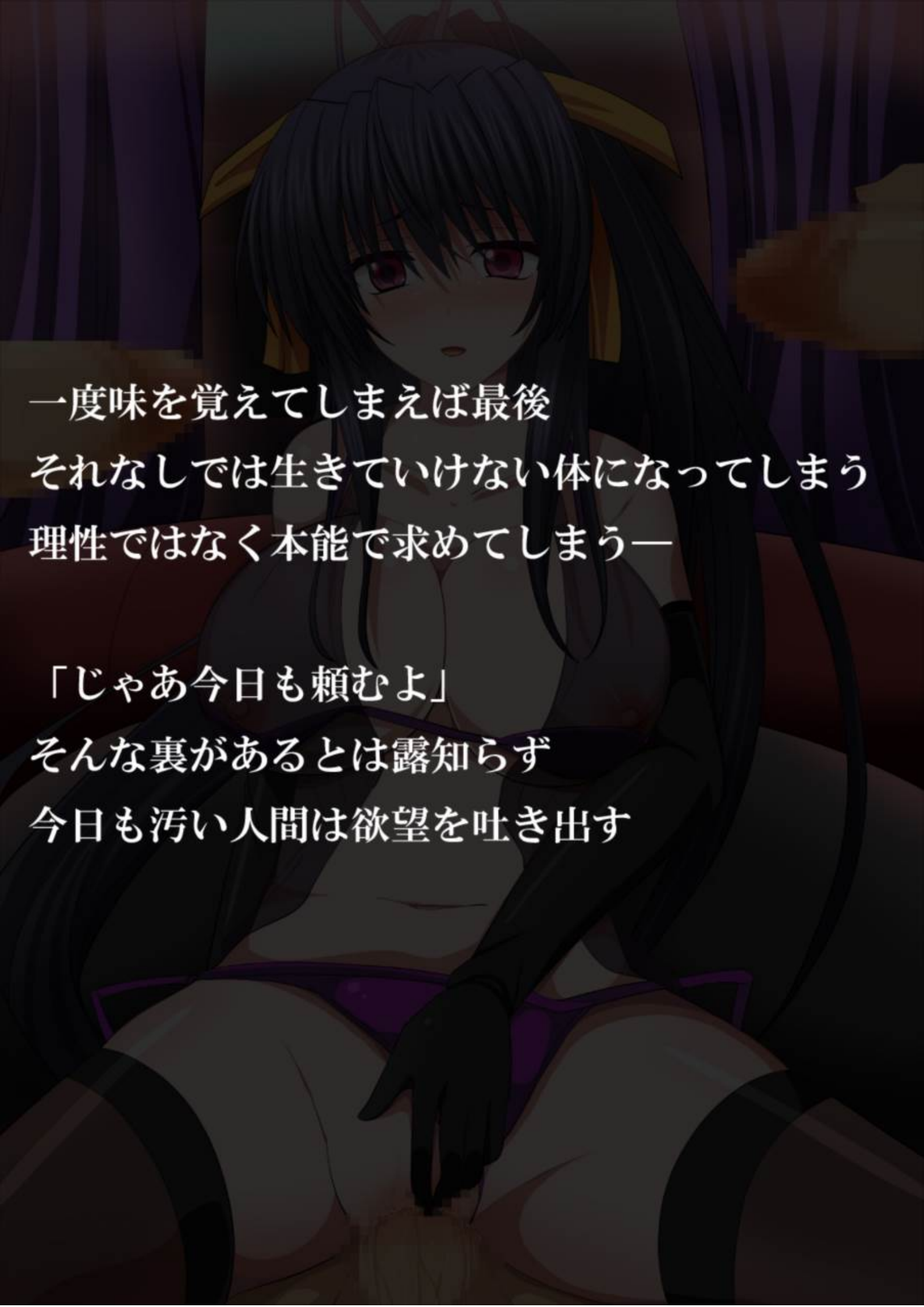
ズ



「おおツ？！おお……！そんなに吸いついたら……！
んおおお……ッ！」

（な、なにこれ……頭がくらくらして……
不味くて、臭いの……でも……たまりませんわ……！）

「こんなにおいしそうにザーメン飲んで……
それならもつといいところに連れてってあげますよ……」



一度味を覚えてしまえば最後
それなしでは生きていけない体になってしまう
理性ではなく本能で求めてしまう—

「じゃあ今日も頼むよ」
そんな裏があるとは露知らず
今日も汚い人間は欲望を吐き出す

「あっ……あん……おち○ちんが……こんなどら……!」

「この子が新入りの子ですか、いいですね」

はあ

はあ

ぬち

ぬち

「具合もかなりいいですな……くうっ……これは長く持たなさそうだ……」

「あんん…おじさまの太いのが…っ！」

きもち、
気持ちいい…っ！」

「うおおおおお…！」

はあ

こんなはずっぽり唾えこまれたら…っ！」

はあ

「まだ若いのに動きは完全に娼婦のそれですね…」

いやいや、恐ろしい世の中になったものですねあ、ははは」

ゆさっ

ゆさっ

ずぶっ

ずぶっ

「は、はやくっ！おち○ちんから白いのを出してくださいまし……！
あれが、欲しくて……欲しくてたまらないのオー！」

「あおうっ！うがッ！絞られてっ、うあああ……！
そんなに締めつけたら、もうっ！——」

ブル

ブル

あッ

あッ

ズッ

ズッ

あッ

あッ

ズッ



「んはッ！……あ……ッ！ん……おああああ……」

「なんていやらしい娘だ！」

「そんなに欲しいならぶっかけてやるー！」



「あはあ………!これ、これですわあ……
精液あつたかい……はああ……!」

「おやおや、あまりの射精の気持ちよさに気絶してしまつとは……

どれ、それほどの膣の締まり、我らも堪能させてもらいますかな」



汚い奴ほど権力をもつものだ
正直者がバカを見る世界

業界の一部では
既に毒性に気付き始めた者もいる
彼らは悪魔アイドルを性奴隷にしていた

表ざたにはせず、あくまで内密に…

「あつ、プロデューサーこんなところにいらしたんですか！
お疲れ様です！」

「いやー新デビューの小猫ちゃん、よかったですよ〜」

「ははは、いや御苦労さま。」

「あの子はウチの期待の新人だからねえ。」

「また頼みますよ」

最近あんまり数字取れなくて、どこも苦しいですから…」

「うむ、私もそれを憂いでいてね…」

出来る限り協力させてもらおうからねえ…っ」



「ところで、こんな舞台裏に何のごようぞしよろう？
忘れ物でもしましたか？」

「ん？いやいや！そうじゃない。

私もね、ステージが大成功した余韻に浸っていたのだよ。

もう歳かねえ、色々と思う所が多くて…」



「はは、まだまだお若いじゃないですかー。

それにしてもあんな可愛い子、よく見つけてきましたね〜

最近では街角でスカウトしても全然引つかからないのに……」

ブルルッ

キキキ

キキキ

「まあまあ、それは企業秘密ということ……

長年やってるとね、色々あるんだよ

さあ、帰った帰った」

「も〜中々手厳しいですね…」

わかりました、今度酒の席でも教えてもらいますから！

では、お疲れ様です！」

ズン

ズン

ズン

「ああ、おつかれさまっ……！うっ……！」



「んんん〜ツ！…んっ…んぐ…んぐっ…」

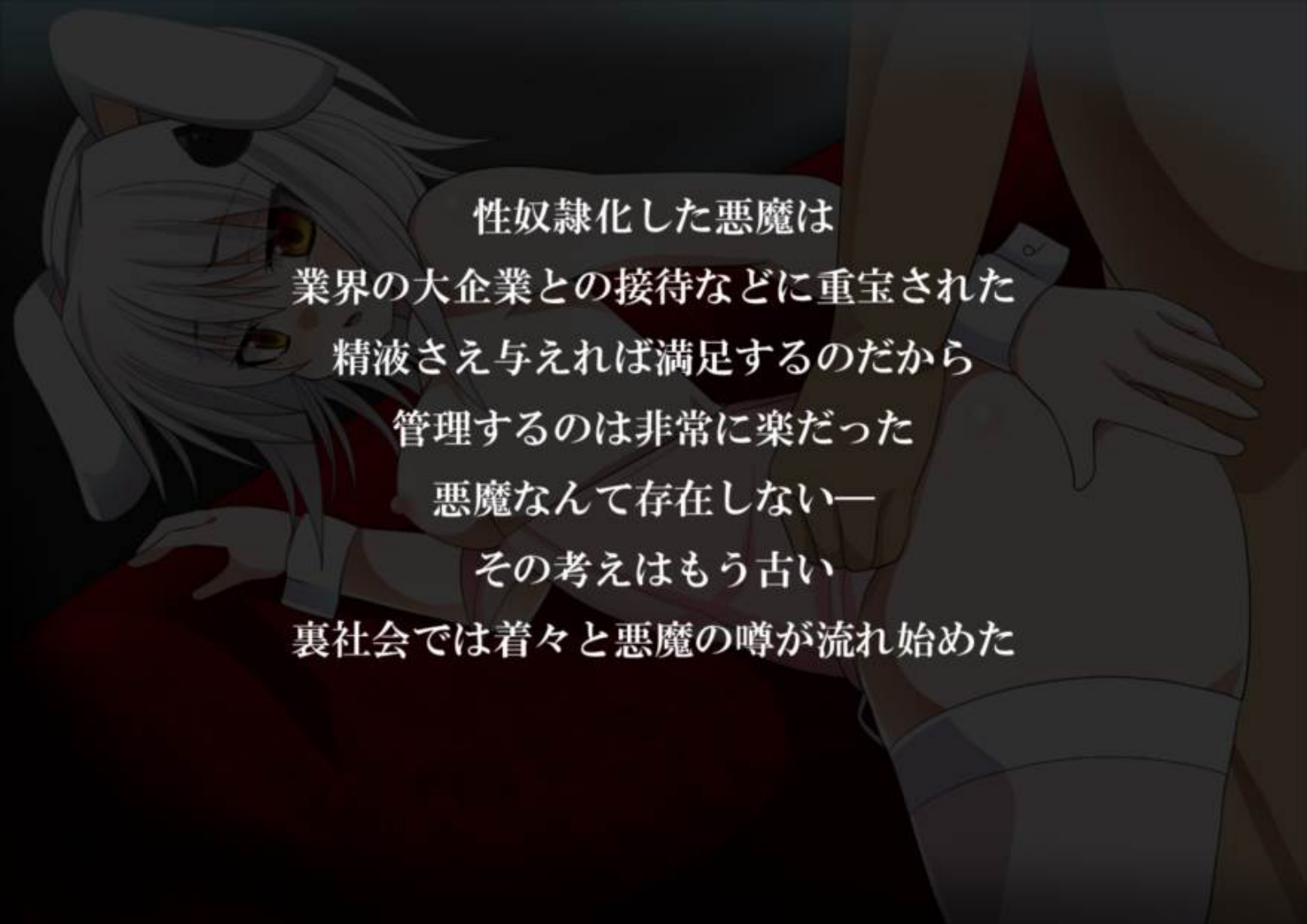
「っはああく…！スッキリしたあ

どうだ、私のザーメンは美味いだろ？

また頑張ったらご褒美をやるからな…」

「んんん…はい…ありがどう、いびごます…」





性奴隷化した悪魔は
業界の大企業との接待などに重宝された
精液さえ与えれば満足するのだから
管理するのは非常に楽だった
悪魔なんて存在しない—
その考えはもう古い
裏社会では着々と悪魔の噂が流れ始めた



「はあ、はあっ！こんな小さい体なのに、
全部、ぜんぶはいった……！」

ぎゅ

「あぁ〜……ふふふ……」

ずん



「あっ…あう…ッ！い、いいです…！
もっと、奥の、赤ちゃんの部屋を……」

「はあッ！はッ…！わかった、わかった…！
奥まで犯し抜くからねえッ！」

ガッ

ガッ

ゲッ

ゲッ

「どうして、しょうか…。ざーめん」

出そうですか？

うあ…！あ…！

「で、でるッ！でるよー？」

あああッ！気持ちいい…！

子宮に擦りつけてザーメンでるっ…！





「あつ……熱いの、きました、あつ……
たっぷり、出して……！」

「おおおッ！キツマン膣内射精いいキメるっ……！
あああああああああ……！」

ズグツ

ズグツ

ズグツ

ズグツ



「っ、はあ、はあ…ツ…」

私の未成熟な体を使って頂き、

ありがとうございましたあ…」

「本当にネコみたいで最高…」

ペットに、ペットに欲しいなあ…！！

いつでも中出しセックスできる

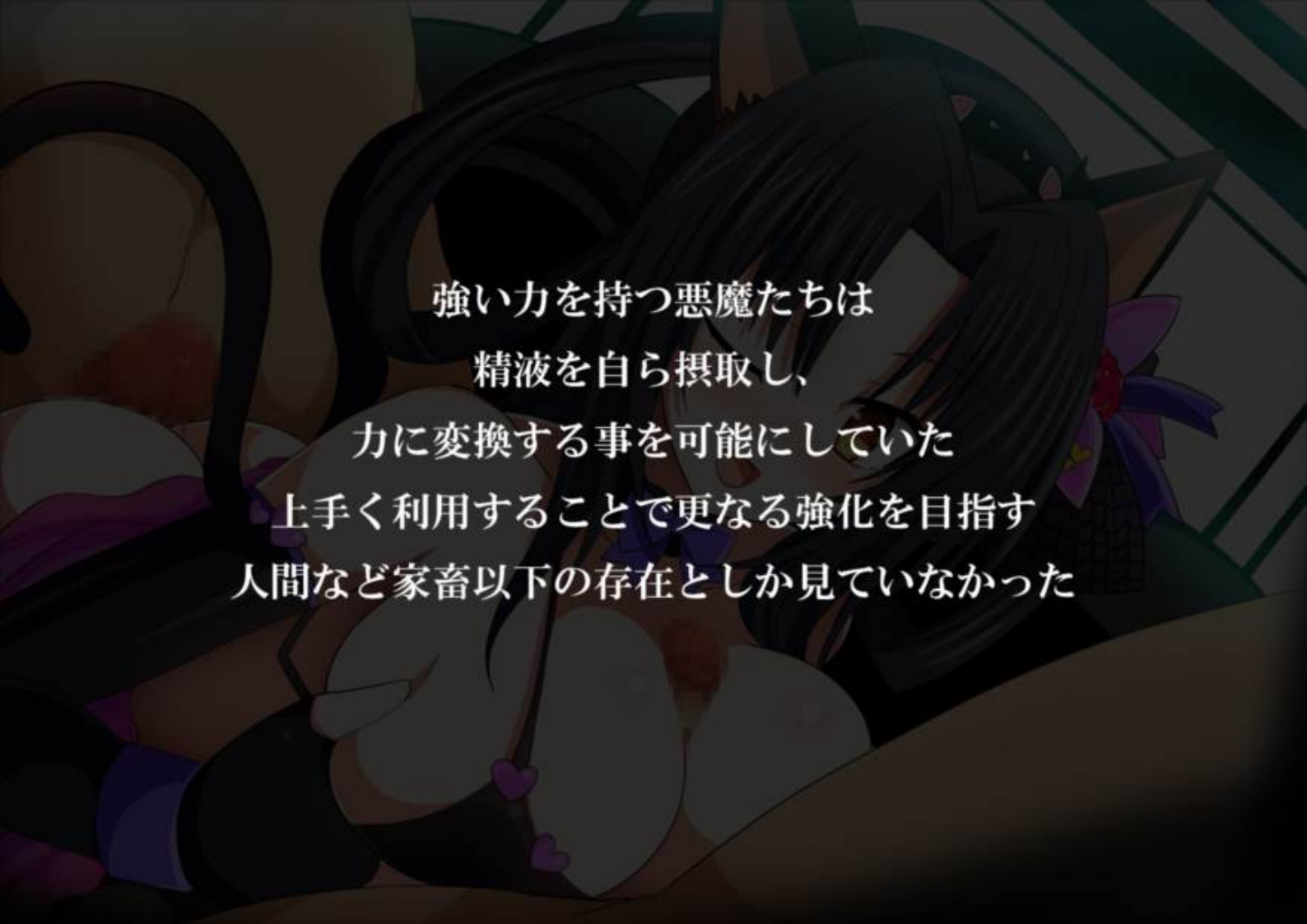
えろねこ欲しいなあ！」

はあ

はあ

ぶっぴん

びんがっ



強い力を持つ悪魔たちは
精液を自ら摂取し、
力に変換する事を可能にしていた
上手く利用することで更なる強化を目指す
人間など家畜以下の存在としか見ていなかった

「わあ、すごいニヤ！こんなに大きくなって…
そんなに私を犯したかったのお？」

「ああ、黒歌ちゃん…！
おっぱい気持ちいいッ」

ぐいっ♡

あざっ♡

ん

「お、お尻にこすりつけるのも、いいっ」



「それじゃ、たっぷり出してね？」

「おっぱいをおま○こみたいになんか突いていいからねん♪」

「お、おおッーありがたい、ありがたい……！」

「おおッー」

「ふふ」

「たばい」

「たばい」

「お、おま○こ……！？挿れたい……！」

「黒歌ちゃんのおま○こ、使ったい……！」

「すり」

「すり」





「ほらほら、まだ残ってるでしょ？」
全部出すニヤァ」

「おおっ、おうふっ！
そんな、また、またイケ！」

おに

ずじじじ

「くろかちちゃん〜ッ！」

アッ

アッ

「ふふ…上出来ニヤ…！」

いろいろ聞いてれば

気持ちよくしてあげるからね？

またいつぱい溜めてくるのよ〜」

どろお。

「は、はいっ…！」

またおっぱいでヌいってくださいら…！」

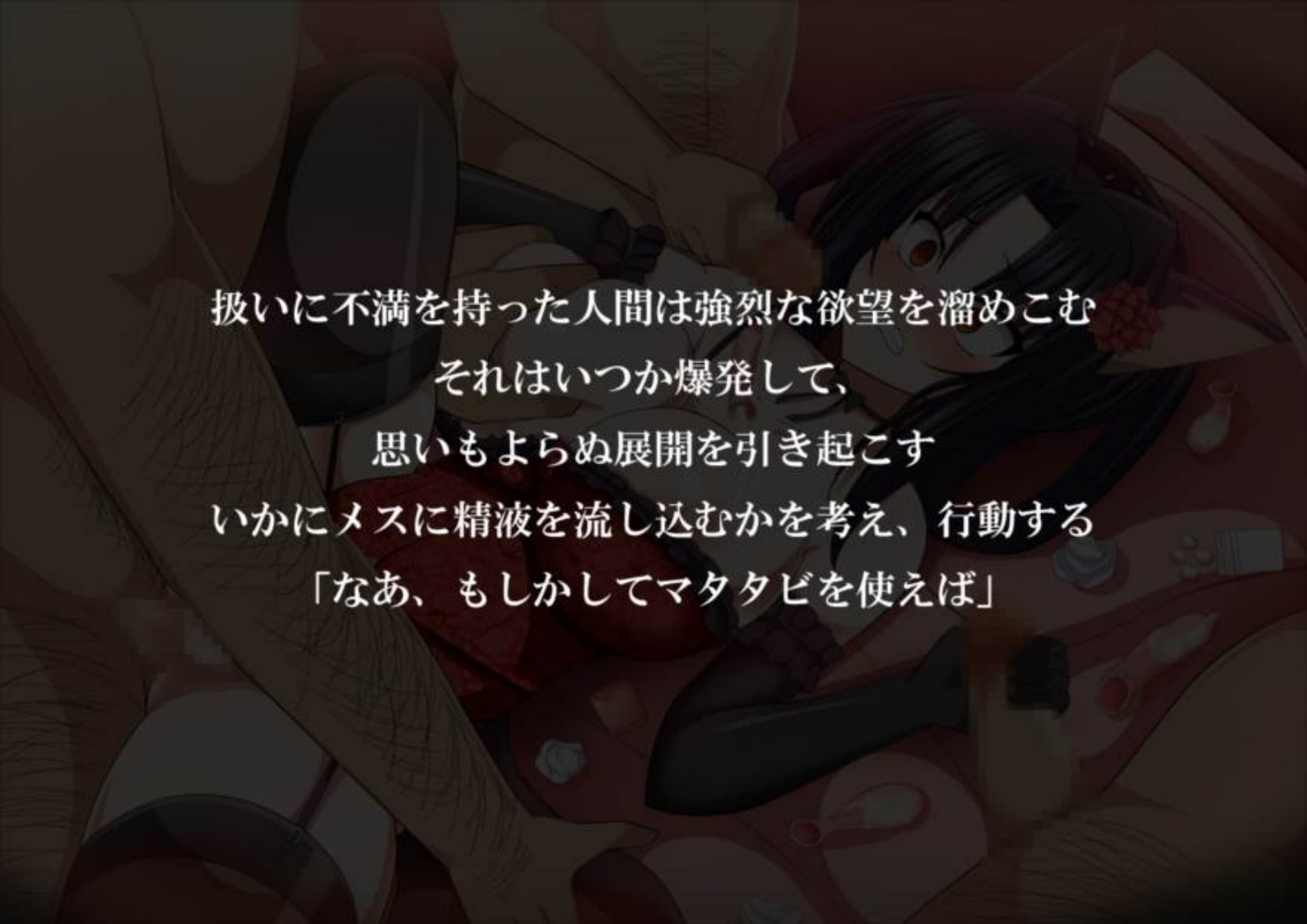
「……」

びんぽんぽん

びんぽんぽん

びんぽんぽん





扱いに不満を持った人間は強烈な欲望を溜めこむ
それはいつか爆発して、
思いもよらぬ展開を引き起こす
いかにメスに精液を流し込むかを考え、行動する
「なあ、もしかしてマタタビを使えば」

「ひ、ひゃあッ！ち○ぽオ！
もっとな、もっとな挿れてえ！」

「ぐうっ！まさか本当に効くなんて……！
この淫乱メス猫っ、
精液全部持ってかれる……！」

「おいおいもうゴムがなくなっちゃったよ。
まあいいか」

ぐうっ
ぐうっ

ぐうっ
ぐうっ



「いいいっく！いいからあ！」

もっとズコバコハめて♪

私のま〇こ壊していいからあ！」

いい

あ

ギョッ

ズン

ズン

「うおッ…くう！」

だらしねえ体しやがってえ！

俺らが今まで下手に出てりや

いい気になってなあ…！！

メスの分際が、思い知れッ！」

ズン

「あぁっ！？ふ、深あッ！

ち○ぽ膨らんできた！？

ま、まさかあ……！」

あッ
あッ

「そうだよ！たっぷり種付けしてやるよッ！

孕ませてやるっ……！！アッ……！

ぐあああ……！！」

「おいおい薬もキめてるからって

乱れ過ぎだなこりゃ

まあこいつはもう俺達の

ペットみたいなものだし、

ぎゅっ

飽きたら捨てて他のネコを拾えばいいしな……」



「あにやああー!!」

だ、出されてるッ! 膣に直接サマーメンっ!...

ああああっ!...

あゝ

うゝゝゝ

ズグ

ズグ

ズグ
ズグ
ズグ

「うおおッ...! おおおっ!...

クソネコがあ、孕めえ、孕めッ!...



「う、うれし♪ザーメンほしい！
もっと、もっと欲しいわー♪」

「おら、大好きなザーメンを顔にもかけてやる
嬉しいか!？」

びんびん
びんびん
びんびん

びんびん
びんびん
びんびん

「く、くそ。ガンガン締めつけてきて、

ち○ぽが抜けやしねえ…

そんなに種付けして欲しいのかよー!!」

はぁ

はぁ

はぁ

「うん、うん…! いっぱい頂戴い…

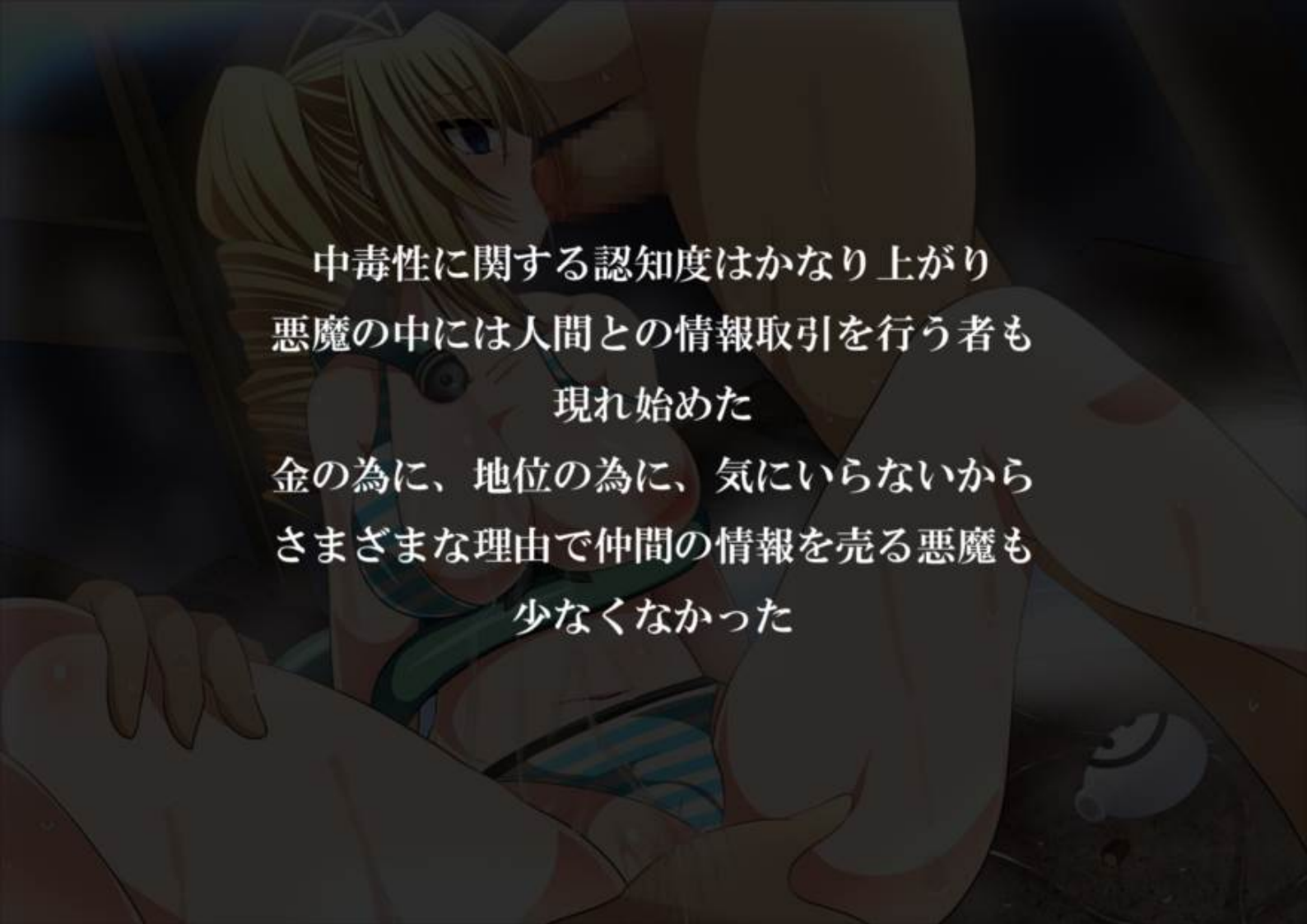
活きのいいザーメンが欲しいのよお…♪」

まっ

まん

「なんてヤツだ…っ

次は俺が交尾するから出したらそこ代われ!」



中毒性に関する認知度はかなり上がり
悪魔の中には人間との情報取引を行う者も
現れ始めた
金の為に、地位の為に、気にいらないから
さまざまな理由で仲間の情報を売る悪魔も
少なくなかった



「んんっ！じゅぶっ…じゅぼっ！ぐぶっ」

「いやーおじようちゃんお酒弱いねえ

もう意識が混濁しちゃって…

そんなんじゃ悪い男に襲われちゃうよ？？」

ががが

ぐわぐわ



「んっ？…んん…んっ…」

「男を知らなさそうな子だから仕方ないね
ここも使いこんでないみたいだし…
でもオナニーは好きみたいだね？」

ぐんぐん
ぐんぐん
ぐんぐん

「んんぶっ、んんんんんんんんんん」

「うお、このガキ手マンされて潮吹きやがった！
こりや相当な淫乱の素質があるな！」

ズグッ
んんんんんんんんんん

「もともと緩かったのに

さらに口がゆるくなっちゃまった

これじゃオナホに入れてるのと

変わんねえなあ」





「あらー出すぞっ」のオナホっー！」

「あっ、んじゅっーじゅりゅっ、じゅりゅっー！」

びゅん

びゅん

おん

びゅん

びゅん

びゅん

「ほらほらしっかり飲めよ〜？」

「これからたっぷり味わうごちそうだからな？」

「こいつ何度もイってるぞ！
指をきゆうきゆう締めつけてきやがる」



「あーなんかしよんべんしたくなってきた…
おい、こっちも飲めよクソガキ」

「んぶううっ！んん！う？じゅつ、
じゅりゅるるるっ」

いんま…

んびん

んびん

「おらイケよこの変態！」

ガキの癖に体だけは
いつちよまえに男を誘いやがって…！」



「んんん！うんんん？……」

ゼツ

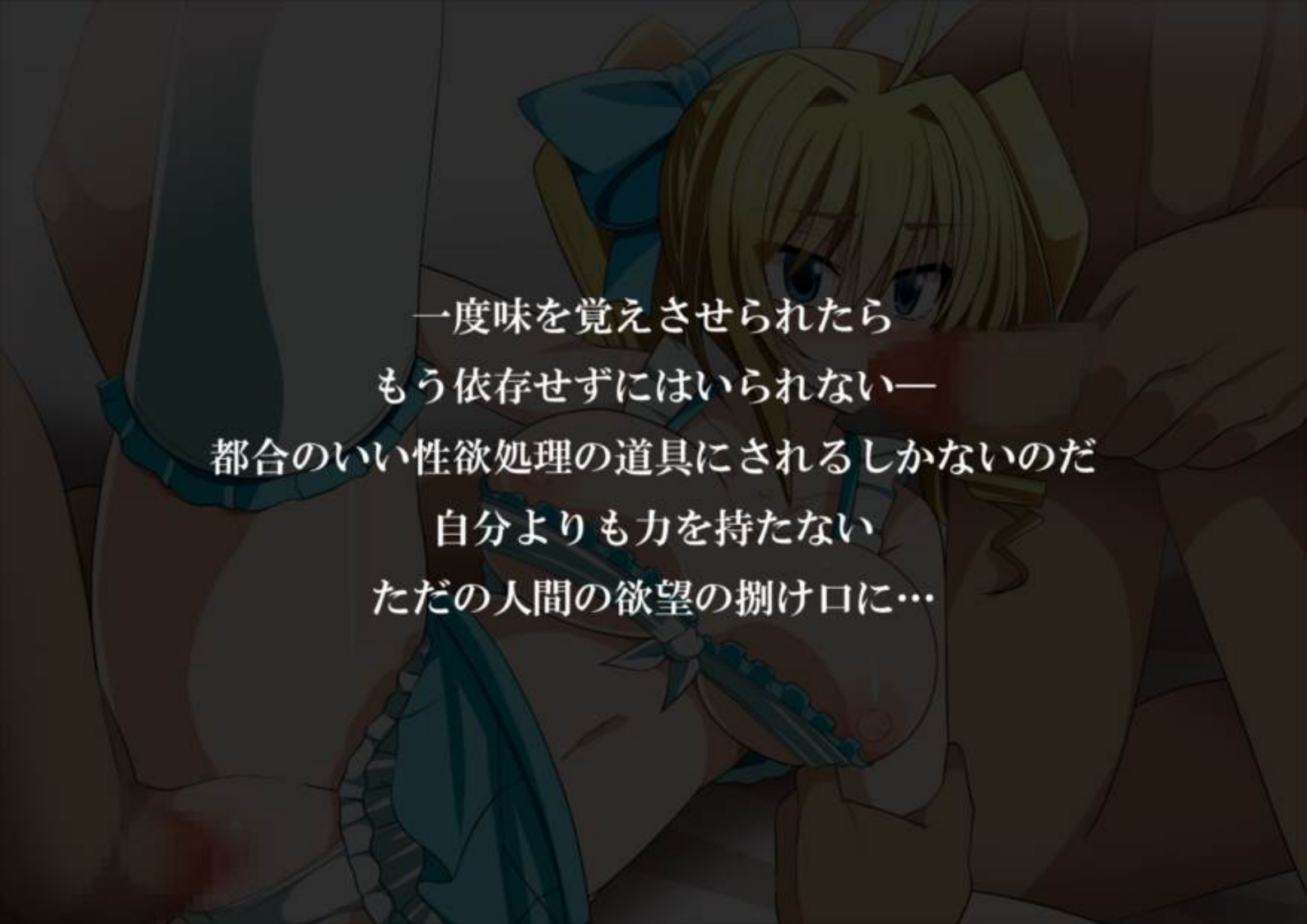
「ぎゃははは！また潮吹きやがった！
これはいい拾い物をしたなあ」

ぐしゃ

「あースッキリした。」

「こいつ売ったら結構いい値になりそうだわ」





一度味を覚えさせられたら
もう依存せずにはいられない—
都合のいい性欲処理の道具にされるしかないのだ
自分よりも力を持たない
ただの人間の欲望の捌け口に…

「んっ…いやあ…」

ぐいっ

「レイヴェルちゃん今日もお疲れ様
ほらほらご褒美だよ。」

まゆ

「きっつう…！」

ち○ぽぐいぐい締めてきやがる…」

みちち…





「あつ…お、おち○ほが…
こんな、近くたい…」

なま

なま

「どうしたの？」

「遠慮しないで舐めてよ」

ぬん

ぬん

「んっ…ちゅっ、ぺろっ…んんっ…!」

んんっ

ぴちゅ

「お、おおっ…キタきた…!」

「そうだよ、たっぷり舐めていいからね。」

ぬん

「舐め始めた途端

めちやくちやすべりが良くなったぞ!

ううっ、気持ちいい…!」

ぬん



「はあ、はあ…もっとう突いてください…

深く、深く…!

はあ

はあ

ふるん

はあ

「え？仕方ないなあ…

ほんと最近ち○ぽ中毒の

アイドルが多すぎるわ」

はあ



「ほらっ！レイヴェルちゃん飲んでいいよ！

ご褒美だホラー！ううっ」

びびっ

びびるっ

んぎゅんぎゅん

「ん！のじゅぽっ！じゅぶっ！

じゅっ、じゅぞぞぞおっッ」

ズッ

ズッ

「な、なんてがつつきっぷりだ…！

こっちにもたっぷりご褒美をやるぞ！」



「ああ、ハ…痺れる…っ！
濃いザーメンの味、最高ですわあ…♪」

んんんん

あ

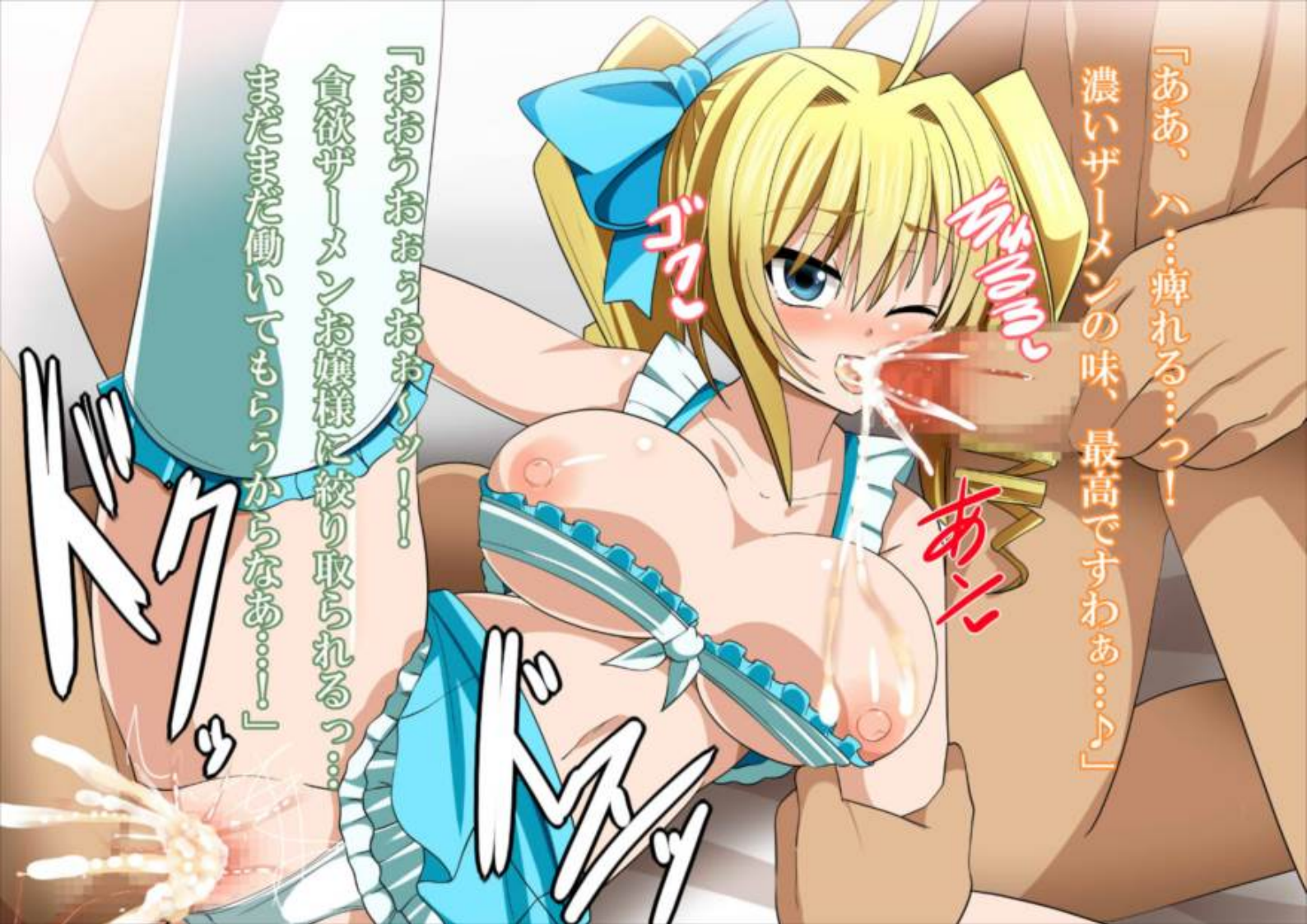
ご

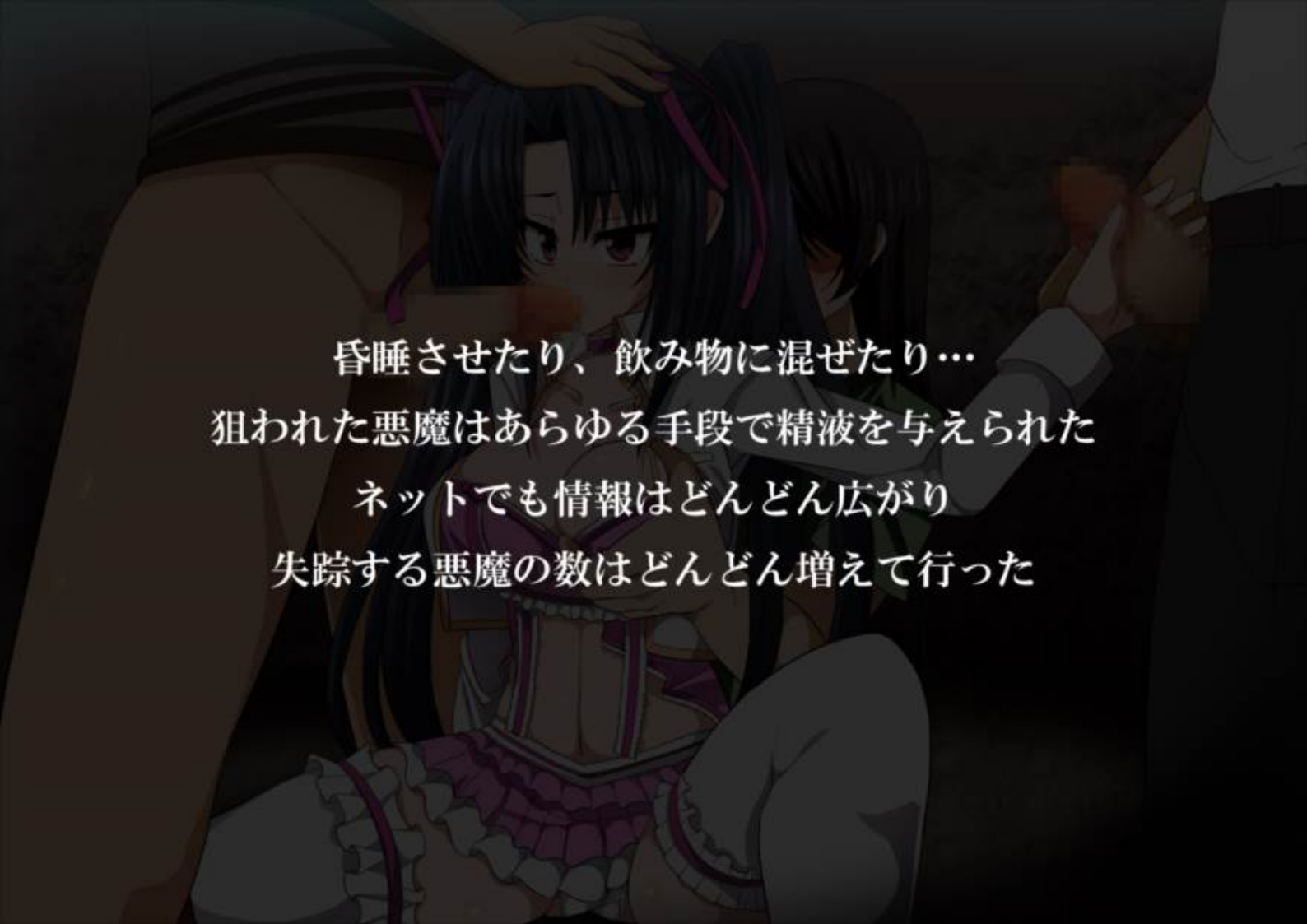
「おおっおおっおおっ！
おおッッ！！」

食欲ザーメンお嬢様に絞り取られるっ…

まだまだ働いてもらっからなあ…！」

んんんん





昏睡させたり、飲み物に混ぜたり…
狙われた悪魔はあらゆる手段で精液を与えられた
ネットでも情報はどんどん広がり
失踪する悪魔の数はどんどん増えて行った

「んん……んん……んん……」

「あ、レヴィアタンちゃんおはよう！
お口借りてるね」



「んぶあつ！君たち、なにしてるの！
こ、こんな…やめなさい！」

「や、やだよお。」

可愛いレヴィアタンちゃん
で抜くまではやめないよ？」

あは

あは

あは

あは

「ほ、ほら、こっちもしごいてったら」



(て、抵抗したいのに頭がボーっとする……!?)

「マジで嫌ならもつと暴れてよお
本当はおちのぽしやぶるの、
す、す、すきなんでしょ!?!」

「こないやらしく育ってて、
嫌いなハズないってえ
ああ、やわらけ……」



「ふんっ……ふんっ……どきどき……」

「おおお！本当に飲んでるぞお！

やっぱザイメン好きの
変態アイドルだったんだ……」

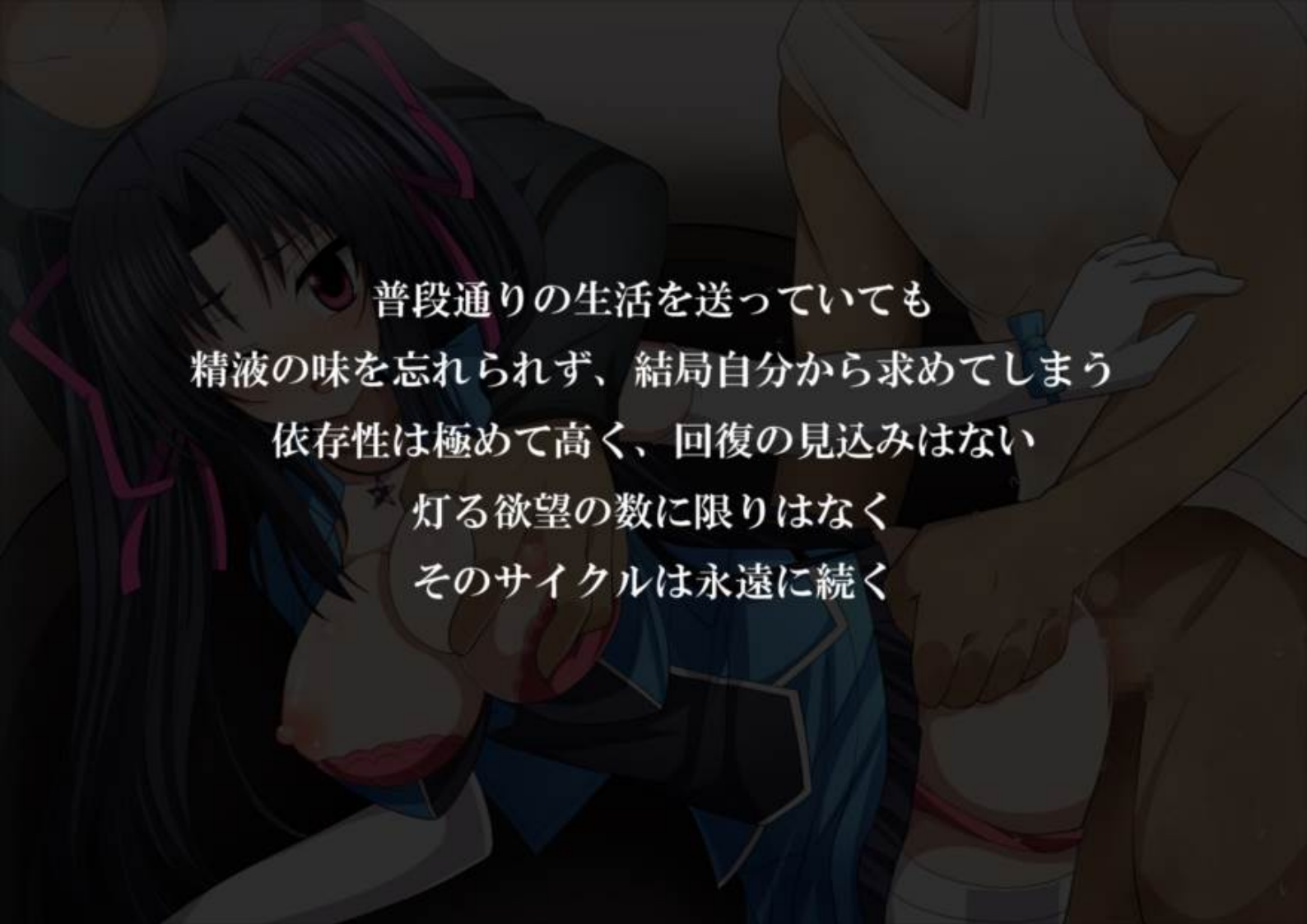
んっ…
んっ…
せわ
あ

「しょうがないなあ、

仲間も呼んで可愛がってあげよつと

これからもよろしくね」





普段通りの生活を送っていても
精液の味を忘れられず、結局自分から求めてしまう
依存性は極めて高く、回復の見込みはない
灯る欲望の数に限りはなく
そのサイクルは永遠に続く



「あ、つちよつとおっ！」

「そんな、いきなりい…」

「げ、現役アイドルとハメられるなんて…
我慢できるはずないんだなあ…」

「おっばいでけえ」

「いっしょいっしょ」

「ぶっぶ」



「も、もう…無理やりはだめなんだからねっ
女の子には優しくしないとだめだよ?」

「う、うるさい!セックス中毒の癖に…!
おああッ!締まるなあ…」

ぐに

どに

ドズッ

ドズッ

「だ、だめっ！そんなに激しく…っ
おっぱいも、掴まないでえ」

「はっ、はっ…はっ！」

あ

あ

「イヤイヤ言う割に抵抗しないんだよなあ…
本当にスケベだなあ」

ズン

ズン





「あーっ、ちやうどちやうど...」

セーブ

ズン

「あーっ、ちやうどちやうど...」

ズン

「あああ〜…でるう…絞り取られて…
ひさしぶりの女あ…」

「あ、あああ…す、すごいッ…
どんだけ溜めてたの…止まらないよ…」

「うお、ちよつと引くわおまえ！
どんだけ射精長いんだよ」

びびり

びびり





「っ、おふらッ」

「や、やだあつゝすごいじゃないっつ！」

「あつゝだめっ、撮影はNGだよお」

「何がNGだ嬉しそうな顔して…」

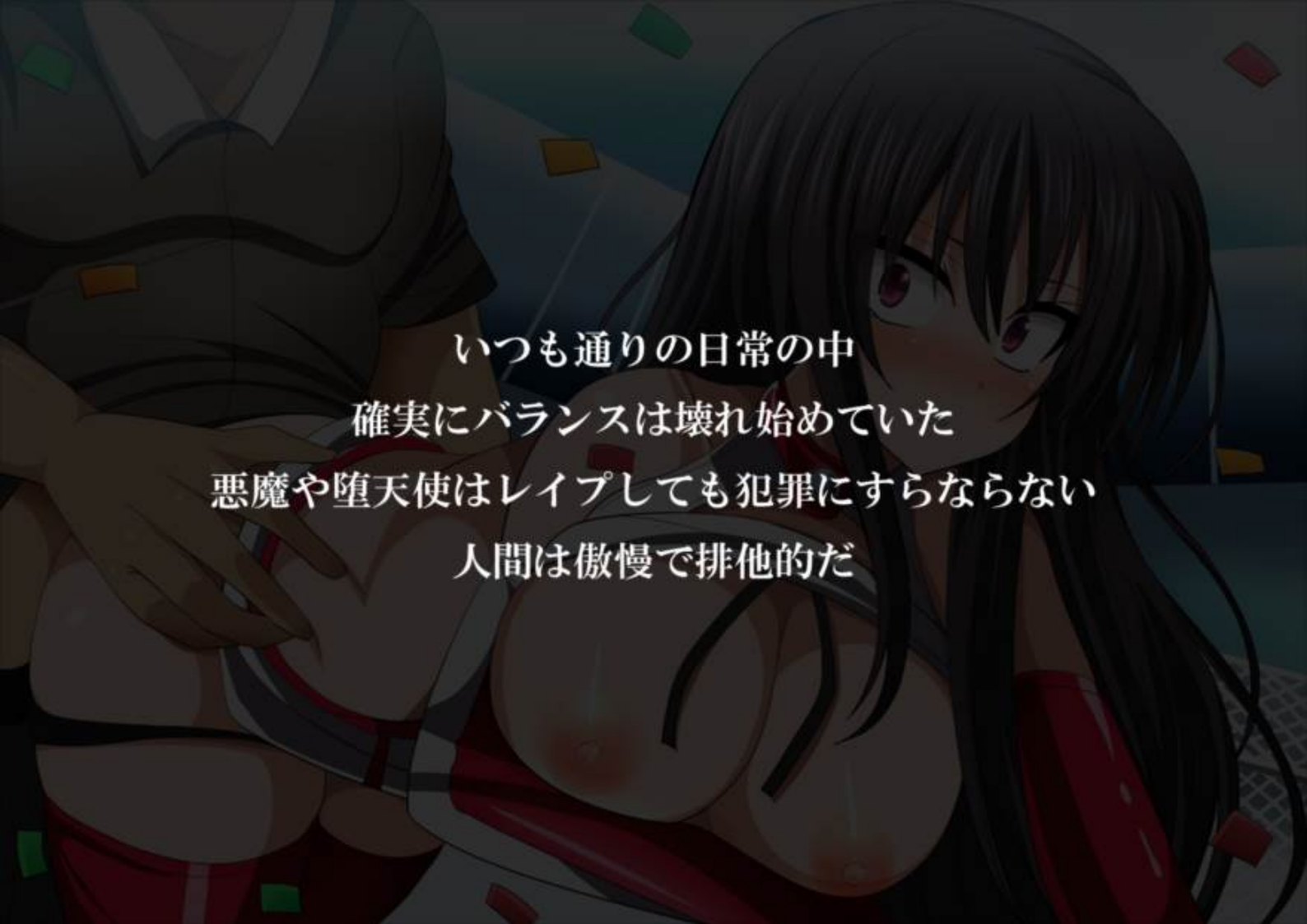
「理由つけてヤラれるのが好きなだけだろ！」

「まったく、」

「本当アイドルってのは」

「エロガキばっかだな！」

「ムッ」



いつも通りの日常の中
確実にバランスは壊れ始めていた
悪魔や墮天使はレイプしても犯罪にすらならない
人間は傲慢で排他的だ



「あゝ入ったああ…きゅっ…っ!」

「えっ…やちよりーんやっ…
あッ…うそお…っ!」

「んんん」



「お、おじさんーなにしてるんですかー！
やめてくださいー！」

「いやあ君みたいなの
かわいらしい女の子がいるとね
おじさん、我慢出来ないんだよっ…！」

ぱん

イキ

セメ

ぱん



「いやあ！誰か助けてえ！」

「誰も助けてくれないよ？」

むしろみんな君を

犯したがつてるだろうしねえ…」

ばん

ばん

おん

おん



「うっっ、あなた、許しません……っ！
今に……！」

「くっ！急に締めつけが増して……っ？
こ、これは、でるっ……っ！」

ズ
ズ

ズ
ズ



「おおおおおおおおおッ……!」

「え……?」



「いやあーやめてえー！
抜いて！抜いてっいたらあー！」

「で……で……ッ！」

「中出し……ッ！」

ズン
ズン

ブル

ブル



「ま、まだ出すぞおっ！
孕むまで出してやる！」

「あつーはんツーちよ、
やめっ……！」

「乳がぎゅ」

「あつーはんツーちよ、
やめっ……！」

「あつーはんツーちよ、
やめっ……！」

「あつーはんツーちよ、
やめっ……！」



「いやあああああああ！」

ズンッ

「くおおおおおッー！」

あッ



悪魔も墮天使も

人と同じで見分け方は限りなく難しい
それでも精液に対する異常な執着で
一般人たちにも見分けられるようになっていた
だが、それはお互いにとって悪い関係ではない

どちらも求めているのだから—

「んぐら」

ズ
ズ
ズ

「あー入ったあツ…」

「ははは、この子はしゃぶってるだけで濡らしますからな」

「すぐにち○ぽも入ってしまっんですなあ」



「ほっ！ほっ……！」

やっぱり若い子の体はたまりませんよ！
おおっ、絡みつく……ッ！」

ズン

ズン

んんん

「ほらほら、

よそ見してないでちゃんとしゃぶって……！」

んんん



「ちっ！んんんんッ！」

がしゃあ〜

グワッ

「いやー相当な淫乱ですなこの子…

本当すぐイっちゃうんだから。」

「ま、そういう若い子がいるおかげで

わしらも助かりますがね…

いやー毎日性欲の処理に困りませんわー」

「……」

グム

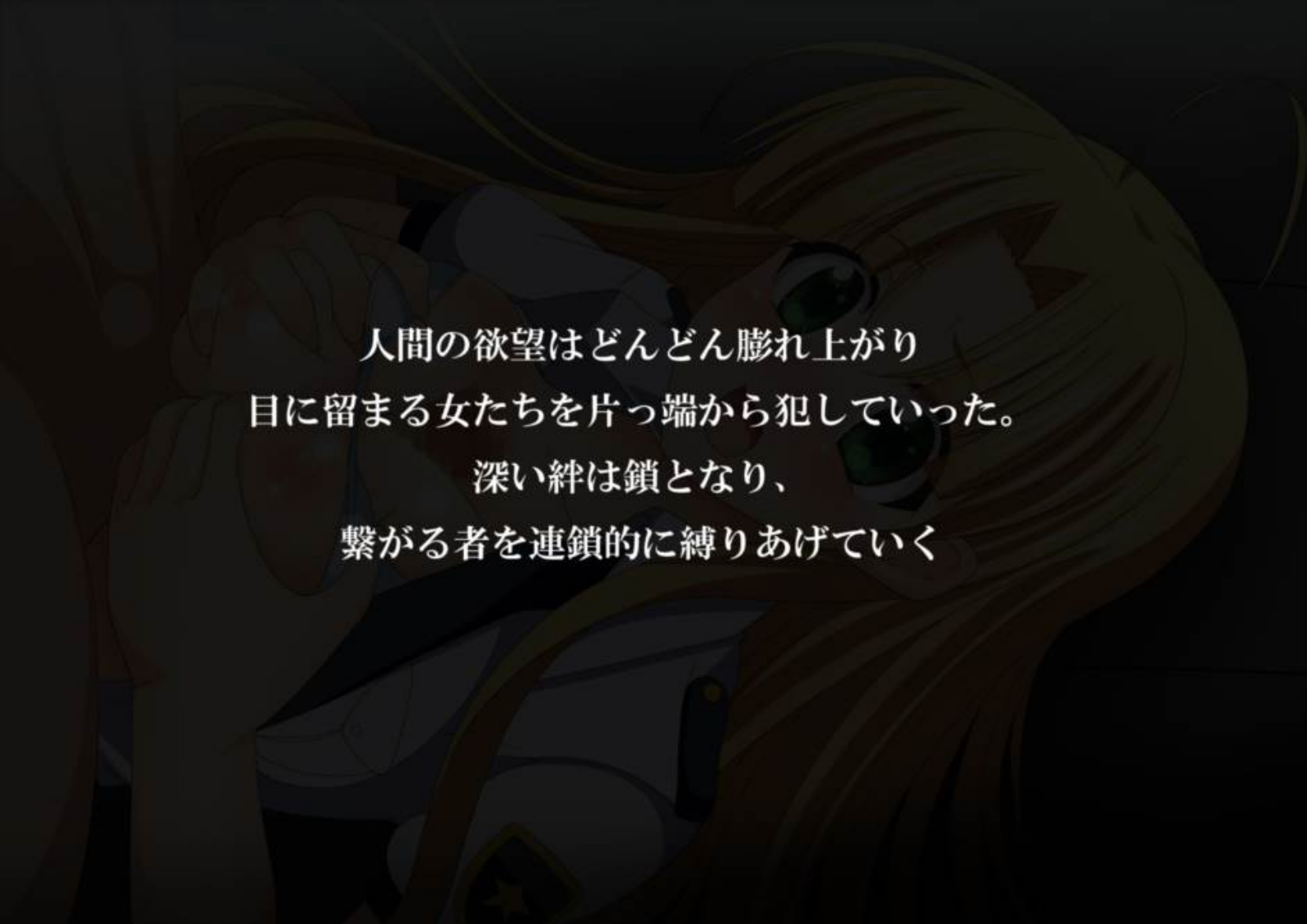
グム

グワッ





END



人間の欲望はどんどん膨れ上がり
目に留まる女たちを片っ端から犯していった。

深い絆は鎖となり、
繋がる者を連鎖的に縛りあげていく

「~~~~」

「そのでかく成長した胸で気持ちよくな」

ずんずん



「ふふふふふふふふふふ」

「そうだ、いいぞ……! そうやって
挿んで力を入れてる!」

すっぴん

すっぴん



「あつ、何かぬるぬるしたものが…
き、きもちいいんですか?」

「おおつ、いいよ。
そのまま続ける…」

ずわん

ぬる

ぬる

ずわん



「どんどんおっきくなってますよー?」
あ、あついで…」

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ズンズン

「はあっ、はあ。いらぬ、いのちも…!」
胸の中であついで」



「あう、こんなにくさん…
すつきりでしたか…?」

「ふう〜。ああ、すつきりしたよ。
また頼むわ」



「魔王の嫁とセックスできるなんてなあ…
くっ。たまらん…!」

「リアス様とヴェネラナ様の為…
はやく終わらせて下さい…」

もみ

もみ





「わかったわかった！」

どうせこんだけ締められたら長持ちしねえよ」

「くう、私が、このよつな……
あつ、くっ……！」

アッ

アッ



もみ

もみ

「いやらしい体しやがって、
魔王にだけやらせとくのは
もったいねえなっ…
どうだ、定期的に抱いてやろうか？」

「ふざけた事を…っ
あ、ああっ…！はげし…！」

ズン

ズン



「中で…いいな!?」
「おっおおうおうおっ…!」

「くっ…っ…っ…」

びびっ

びびっ

ぐっ

ぐっ



「はあ、はあ...
教えてもらえますよ...!」

はあ...

もみ

はあ...

もみ

「はあ、よかったよ。
たつぷり中に出したし、
これでおまえも...」

びびび

びびび

「きやあつー！ちよつと、なあにっ…ひっー！」

「い、イリナちゃんのおっぱい…
はあはあ…！」

びん

ズ
ズ
ズ



「うそー!?!これっておち○ちん...?
なにしてんのよ!」

「でっかいおっぱい...
おおう...うう...」



「いたいっ、そんなに強く掴まないで！
きやつ、やだおっきくなってる！」

「あああ〜！」

「でかばいずり最高〜っ！」

ズッ

ズッ

ズッ





「いやあ!んぷっ、うあああ……!」

びびっ

「んっ!」

おん

びびっ

びびっ

「なにこれ…」

「ザーメンだよザーメン…ぶひっ…
気持ちよくなつてたっぷりでちやつた…」

グッ
グッ

グッ
グッ



「これでイリナたんもぼくだけのものだよ
ぼくだけのアイドルになるんだ」
へへへへっ」

ぞんじお...





おはよう

おはよう

おはよう

「ああ……っっ」

「今日もコイツで抜いてくか
あらよっっ」

おはよう

「ほら、なめるよ」

おまえの好きなち○ぽだぞ」

ドッ

ドッ

ぴゅ

あや

「ほんつと都合のいいセックス道具だ
な
おかげでオナニーの必要も
なくなっちゃったよ」





「どんだけヤっても締め付けがいいし…
子宮つくの最高う〜…!」

「あつ、ああん、いい…
もっど…」

ズン
ズン

あゝ

あゝ

「こっちもしっかり舌つかえ
精子出してやらんぞ」

「ああ、申し訳ございません
んっ、んんっ、ちゅ、ぴちゅ」



「でるっ、子宮の奥で出すぞ……！
もっと、締め付ける……！」

「良く出来たご褒美だ
受けとれっ！」

ズクッ

ドクッ

ズクッ

ズクッ

「あの、優しくしないでいいので……
気持ちよくなってください」



「なっ、ごっごっでこんなに大きくなるの…?」

「太くて、熱い…!」

ズ
ン
ズ
ン

びゅっ

「リアス様のおっぱいが気持ちいいから…
さ、ずりずりって挟んで」



「お母様、無事なんでしようね…?」
騙してたら承知しないわよ」

「大丈夫大丈夫…」

俺だって穏便に済ませたいからさあ

頼むよ」

キッ

おっ

おっ



「胸で挟んで気持ちいいのかしら…?」
それにしても固いわ…!」

「そりゃ気持ちいいに決まってる!」

腰が勝手に動いちゃう…!」

んっ…

ずいっ

ずいっ

んっ

んっ



「ひやああつ！なんかでたわよ？！」

ひやあッ

びゅん

「男が気持ちよくなつた、証さあ……！
はあ、はあ……よかつたあ……」

びゅん



「に、苦いわ…ちよつと飲んじやった

でも、なにこれ…

嫌いじゃ、ないわね…」

「うへへへへ、そうだろうそうだろう

ぢ、もう一回…」



「ふいふい やっぱり結構ですのど……」



「まあまあそういわずにさあ
これしやぶつたら
あつという間にモテモテだよ？」

「んんっ、じゅりゅっ、じゅる…」



「おっ、いいねえ

舌も使って気持ちよくしてくれよ」

「さすが要領がいいなあ…
Mのおおまけや、わー！」

ハッハッハッ

ハッハッハッ

「んじゅっ、じゅりゅ、んんんっ！」



「んんんんんんんんうー？んんんうー！」



「ほらっこれがモテモテになる薬だ、
おおっ……」

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ……」



「そうそうしっかり飲んでね
しっかり飲んだら人生変わるから、
へへへっ」

「ああっ、あああーふとっらい…!」

ズ
ズ
ズ

「レースなんていいから、

セックスだセックス!」

「へへ、でけえ乳だなあ」



「も、もっとガツガツ突いてもいいのよ……？
あつ、んんつ、はああ……！」

「襲ってるのは俺なのにつ
くそ、ぎゅうぎゅう締まって……！」



「んんっ！くうううううううううう！」

あの人以外の精液が、中にい……！」

びんぎんぎん

びんぎんぎん

「おおっ、おおっふう……！
孕ませてやるよ……！」



「はあ、はああ…」

「やっぱり人間の精液って最高ですわ…」

ドグ
ドグ

「くそっ、なんか犯した気にならねえ
もう一回やらせろ！」



「くっ、これが噂に聞く

悪魔を堕とす行為か…!?

私はこんな事には屈しないぞ…!」

ぬぷっ

ぬぷっ

くっ

「そうかー、まあ物は試しだから

最後まで付き合ってよ

態度がキツいと締まりもいいからさ(笑)」

「んなっ!?! 貴様、調子に、乗るなあ…っ
くらくらっ…!」

くらくらっ

「いい感じだ…!」

だんだん感じてきたみたいだな…

だがこっちはもう限界だあ!」



「うおっ、あついでい……なんだ、これは……？
びゅびゅびゅと震えてる……？」

ズッ

ズッ

あッ

「おまえ、具合がいいな……っ
くおおおおっ……！」



「んおおおっ！これは…！
だが、この程度では…」

びんぽん

「いやいや、もう終わりだよ
一度出したらはいそれまで

おまえらは一生おれらのペットになるんだよ！



「わ、私は屈さないぞ…
こんな、くっくっ…!」

ズッ

ズッ

はっ?

はっ?

「みんな最初はそういつてたが、
結局は精液中毒になったんだ。
おまえだけが特別なハズないんだよ!」





永遠に終わらない連鎖

男はひたすら女の膣を突きあげ、精液を吐き出す

女は精液を求め、男の肉棒を受け入れる

人の象徴である理性的なものは存在せず

そこに残ったのは人間ではなく

交尾をするだけのケモノだった

END